

研究の概要とまとめ

1. 研究主題

自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする

児童生徒の育成

—対話的な学びに焦点を当てて—

2. 研究主題設定の理由

本校児童は、他者の考えを素直に受け入れたり、学習課題に対して、主体的に、粘り強く取り組んだりすることができる児童が多い。一方、小規模校で各クラス15名程度と小集団での学びが続く児童らは、遊びを含む様々な活動場面において協働する相手が固定化しており、考えが多様性に欠けるとい面がある。また、意見の異なる他者と自らの考えを伝え合う中で物事を多面的・多角的に見つめ、意見を練り合って新たな考えを導き出し、自らの考えを広げ、深めていくことに課題が見られる。

これらの課題を踏まえ、本校では、令和6年度に研究主題を「自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成—繋がりに着目した道德教育の創造（2年次）—」と設定し、研究を進めた。その結果、意識調査の「道德科の授業では、友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている」という項目では、肯定的評価が82.4%から89.2%に上昇し、「自分と違う意見について考えるのは楽しい」という内容項目でも、肯定的評価が78.4%から91.9%に上昇した。また、「道德の授業では、自分の生き方について考えを深めている」でも、教師・児童生徒共に肯定的回答が上昇した。さらに、「道德科の授業で勉強したことを、自分の生活にいかしている」という意識調査の肯定的評価も4.1%上昇した。このことは、道德科を中心としたかがやきチャレンジプログラムを実施したこと、コンセプトシートの活用が授業改善に繋がったこと等に効果があったと考える。

一方で、課題として次の2点が挙げられる。

1点目は、対話場面において児童生徒の考えに広がりや深まりが十分に見られないことである。これまでも、自我関与を目指した発問や、話し合い活動の工夫を行ってきたが、実際の対話場面では、教師と児童生徒の1対1でやり取りが行われていたり、ワークシートに記入したことを伝えることに終始したりする状況も散見された。このことは、児童生徒が自分の思いや考えをもち、対話の中で考えを深めることができる授業展開の工夫が十分でなかったことが要因ではないかと考えられる。

2点目は、カリキュラム・マネジメントの工夫である。令和6年度の実組では、拠点地域の学校全ての学級で、かがやきチャレンジプログラムを作成・実施した。しかし、「道德科の授業で勉強したことを、自分の生活にいかしている」という意識調査の肯定的評価のうち、「そう思う」と回答した児童生徒は、中心校では48.6%、連携校では45.2%、26.6%と、ほかの項目に比べて低い数値に留まっている。このことは、かがやきチャレンジプログラムが、教科横断的な視

点で展開することや、学校内外の資源を活用すること等、カリキュラム・マネジメントの3つの側面に沿って実施したことについては一定の効果はあったものの、プログラムを通して考える問いや内容項目が、児童生徒1人1人の実態と合っていなかったことが要因ではないかと考える。

そこで、児童生徒の対話を促すことができる主題解釈と発問の工夫や対話場面設定の工夫、自己の課題に応じてカリキュラム・マネジメントを行っていく、自己を見つめる道徳学習プログラムの作成を行うこととする。これらの取組を通して、児童生徒が道徳的諸課題の解決に主体的に向かうことができ、自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成に繋がっていくと考え、本研究主題を設定した。

3. 研究についての基本的な考え

3.1. 自己の生き方について考えを深め、よりよく生きようとするとは

3.1.1 自己の生き方について考えを深めることについて

荒木（2021）は、道徳科における重要な学習活動として、「自己を見つめ、自己の生き方について考える（自己との関わりで道徳的価値を捉える）活動と、多面的・多角的に物事を捉える活動」（p. 40）の2つを挙げている。本研究で焦点を当てる1つ目の学習活動、「自己（人間として）の生き方について考えを深める」（括弧内は中学校）ことについて、永田（2017）は、「道徳的価値のよさや意義、困難さ、多様さなどを理解し、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われる」と述べている。また、浅見（2021）は、「伸ばしたい自己を深く見つめられるようにし、それとともに、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めていくこと」（p. 155）と述べている。

ここからは、自己の生き方について考えを深めるためには、道徳的価値を自分自身に引き寄せて考えること、その活動を通して自分なりに深めた道徳的価値への理解を基に自分自身の生き方に関する思いをもつことが求められていることが分かる。

これらのことから、本研究における自己の生き方についての考えを深めるとは、「道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止め、道徳的諸価値についての理解と自己の生き方を関連付けて考え、自らのこれからの生き方について思いをもつこと」とする。

3.1.2 よりよく生きようとする児童生徒とは

道徳科の目標である道徳性は、よりよく生きるための基盤となるものであり、道徳教育が目指す方向について、文部科学省（2018）には、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育が求めるものである」（p. 15）と述べられている。このことから、道徳科での学びは、道徳科の時間のみならず、様々な生活場面において児童生徒が生かすことを目指したものとすることが分かる。

また、生活場面において児童生徒の道徳性が発揮されることにより、さらにその道徳性は高まり、道徳科の時間の充実が図られるものと考えられる。

このことについて、木原（2021）は、各教科等においてはぐくまれる3つの資質・能力（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性」）は、「道徳教育を推進するための基盤となる力として、各教科等の特質に応じてさまざまに内在している」と述べ、道徳性との有機的な

関連が不可欠であることを指摘している。

以上のことから、本研究で目指す、自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の様態を、「道徳的諸価値についての理解と自己の生き方を関連付けて考えたことを基にもった、自らのこれからの生き方についての思いを、生活場面において生かしたりさらに思いを深めたりしようとする姿」とする。

3.2 対話的な学びに焦点を当てるとは

3.2.1 道徳科における対話的な学びとは

研究主題設定の理由でも述べたように、これまでも、自我関与を目指した発問や、話し合い活動の工夫を行ってきたが、対話場面で、ワークシートに記入したことを読むに留まり、考えの深まりが見られない児童生徒もいた。そこで、本研究では、道徳科における対話的な学びに焦点を当て、対話を通して自らの考えを広げ、深めることによって、よりよく生きようとする児童生徒を育成していきたいと考える。

道徳科における対話的な学びについて、中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）では、次のように示されている。

子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向き合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすることが求められる。

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）より

また、加藤（2019a）は対話的な学びについて次のように整理している。

表 1 主体的・対話的で深い学び

対話的な学び	友達との対話 ・コミュニケーション・知的コラボレーション ・収束的思考と拡散的思考 ・方法にとどまらず目標となる能力でもある。 書物（先哲）との対話 ・知識からの一見の基盤としての百聞、見方・考えの深め 自己との対話 ・自己の在り方、生き方のメタ認知
--------	--

対話的な学びの整理（表 1）には、自己との対話も挙げられているが、自己内対話の中で行われる自己の在り方、生き方をメタ認知することは、まさに、本研究で目指すところである。

また、新川（2020）は、この「道徳科における対話的な学び」の実現に向けて、指導のポイントを次の 3 つに整理している。

① 対話への目的意識がある。

「何のために対話するのか」ということが、教師と子供、子供と子供の間で共有されているか

② 対話による考えの広がりや深まりへの充実感がある。

多様な考え方ができる中心発問、自他の考えについて、多面的・多角的な見方によって考えが吟味できるような補助発問であるか

③ 対話の方法やふるまいなどの育成がされている。

対話するための方法が身についているか、互いが意見を言いやすい共感的な雰囲気があるか

対話への目的意識の低さは、主題設定の理由で述べたように、対話場面で教師と児童生徒の一对一でやり取りが行われていたり、ワークシートに記入したことを伝えることに終始したりする状況にも繋がる。

以上のことから、本研究における対話的な学びを次のように整理する。

表2 本研究で目指す対話の姿

相手	キーワード	留意点
他者	収束的思考と拡散的思考	・ 相手への目的意識があるか ・ 多様な考えができる中心発問であるか ・ 多面的・多角的な見方によって考えが吟味できるような補助発問であるか ・ 対話するための方法が身についているか ・ 互いが意見を言いやすい共感的な雰囲気があるか
書物（先哲）	登場人物への自我関与	
自己	メタ認知	
対話スキルを身に付ける取組を道徳科以外の時間にも実施する		

「道徳科における対話的な学び」では、児童生徒が、自分の考えを他者と共有し、異なる意見を尊重し合いながら道徳的な価値観を育むことが目的であり、そのために教師のファシリテーションは必要不可欠である。

3.2.2 対話的な学びに焦点を当てた取組

- ① 対話場面設定の工夫
- ② 主題解釈と発問の工夫
- ③ 自己を見つめる道徳学習プログラムの作成

① 対話場面設定の工夫

本校では、平成31年から令和4年まで、国語科において対話に焦点を当てて研究に取り組んできた。その時に実施した対話場面設定の工夫が、対話の質を高めることに有効であった。そこで、その時実施した工夫に、ICTの活用を加えて対話場面設定の工夫を行うこととする（表3）。

表3 場面設定の工夫の具体例

場面設定の工夫	具 体
環境構成の工夫	対話する相手やその人数等の人的環境、座席配置、対話のきっかけや考えの深化につながる掲示物や資料等の物的環境について工夫すること。
目的の明確化を図る	対話の目的を教師と児童、児童同士で共有すること。 ・自分とは違う感じ方や考え方に触れるため ・友達と一緒に考えをつくるため ・考えが違うところを見つけ、自分の考えや立場をより明確にするため ・自分の考えについて意見を言ってもらい自分の意見を高めるため ・問いに対して最もよいと思われる意見がどれかを友達と一緒に考えるため など
他者との対話と自己内対話とが往還	時間の保障や自己内対話に導くための発問をする等、それぞれの対話が往還するような学習場面の設定をすること。他者との対話により広がった視野や思考を、自己内対話で整理、知識の構造化を図り、また他者との対話で自分の思考を表出させることができる。
ICT の活用	対話を促すための ICT の活用を工夫すること ・実態や問題、教材の提示 ・自分の考えをもつ ・他者の考えを知る ・話し合う ・自己を見つめる（これまでの振り返りを蓄積） ・生活の様子の提示（映像や画像等） など

なお、3. 2. 2. に示した表2にある、対話スキルを身に付ける取組は、対話の土台となるものであり、本節に示す対話場面設定の工夫を取り入れても土台ができていないと高い効果は期待できない。そこで、表4に示す対話スキルを道徳科以外の時間も含め、日常的に実践し、スキルの充実を図っていく。

表4 対話スキルの具体（丸岡慎弥（2019）を参考に筆者作成）

対話の3段階		必要なスキル
レベル1	「発表できる力」＋「傾聴」	・傾聴（視線、頷き、相槌など） ・対話力 ・教師のファシリテーション・フィードバック
レベル2	「質問すること」	
レベル3	「反対意見（異なる意見）を出すこと」	

② 主題解釈と発問の工夫

令和6年度は、宮里（宮里2022：pp. 22-23）が主題をとらえる観点として提唱している「その大切さ」「それを行うことの難しさ」「難しさを超えてなおの大切さ」の3つをコンセプトシートに取り入れ、主題解釈を実施してきた。その結果、教師が授業展開や発問の工夫、授業での児童の目指す姿までの繋がりを意識できるようになったが、主題解釈を発問のどの部分に生かしていくのかを

授業者がより明確にしていくことや内容項目によって記入しにくい部分があったことなど、課題も挙げられた。そこで、今年度は、主題解釈と教材の繋がりが明確になるよう、発達段階ごとのキーワードや、教材から本時の主題を焦点化する欄を設けた（図1）。また、それぞれの欄の繋がりを作成者に分かりやすくするため解説文を加えたり、作成順序を示したりするなど、改良を加えた。それらの取組により、道徳科の授業において他者との対話や自己内対話が生まれ、対話を通して道徳的価値の理解を広げたり深めたりできるようにする。

図1 授業づくりシート

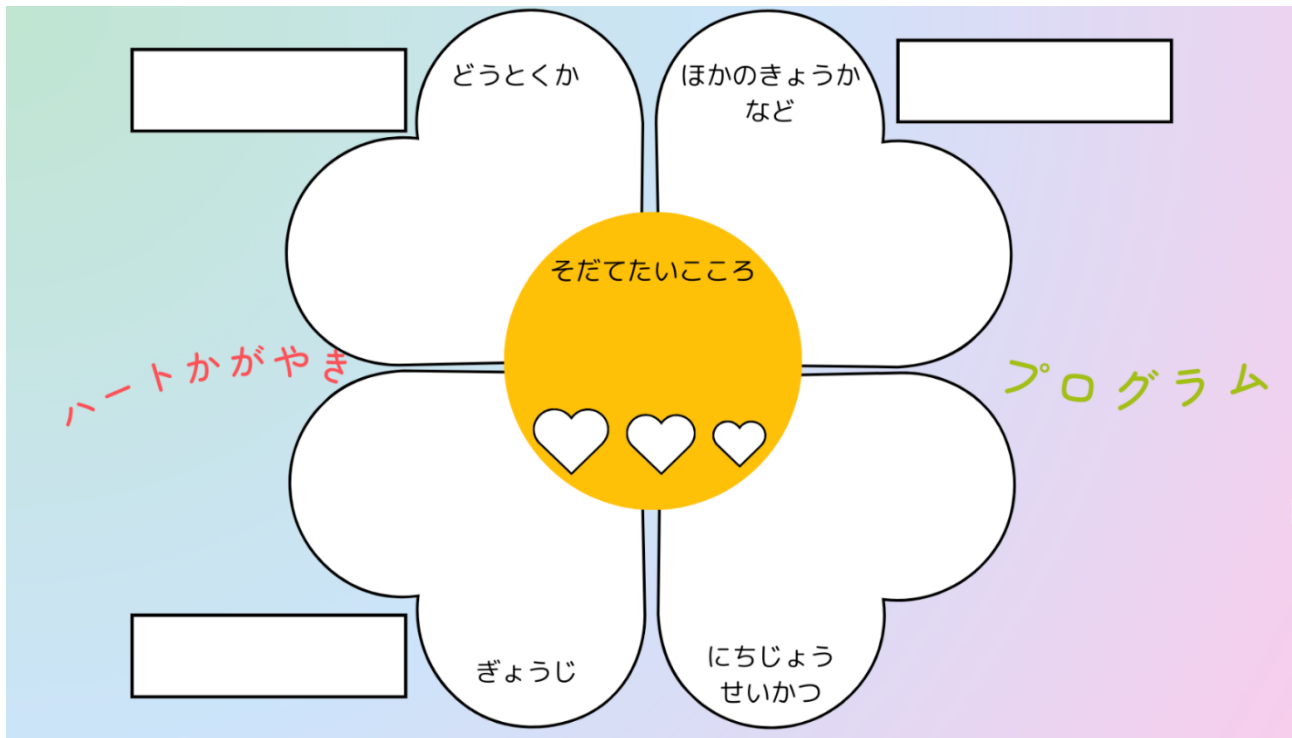
授業づくりシート		学校：
		学年・組： 年 組
		授業者：
【内容項目】		
【内容項目にかかわる児童の実態】		
【教材】		
【主題】		
	自分（自己理解）	他者（他者理解）
（目標）		
（内容）		
（方法）		
（評価）		
【学習指導要領】 （内容項目の概要）		
（指導の要点）		
【発達段階ごとのキーワード】		
【設定】		
【教材から本時の主題を焦点化すると】主題解釈を踏まえてこの教材で何を考えさせるのか。		
【↑を考えるために教材のどの部分が大切か】 （自分）		（他者）
【中心発問】		
【ねらい】～（主人公の気持ちを考える、行動を考えること）を通して、○○に気づき、○ ○する道徳的判断力（道徳的心情、道徳的実践意欲と態度）を育てる。		
【中心発問】		
【児童生徒の予想される反応】		
【切り返しの発問】		
【本時終了後にねらいに迫った児童生徒の発言】		

③ 自己を見つめる道徳学習プログラムの作成

令和6年度は、児童生徒が自身の考えを振り返ることができる「かがやきチャレンジプログラム」を作成し、道徳科と他教科等との繋がりを高める取組を行ったことで、児童生徒の道徳的価値の深化・統合が促された。一方、「道徳科の授業で勉強したことを、自分の生活にいかしている」という意識調査の「そう思う」と回答した児童生徒の割合が、他の項目に比べて低いことから、道徳学習プログラムを通して考えたことを自分事として捉えている児童生徒が少ないことがわかる。

浅見（2023）は「道徳科における個別最適な学び」「学習の個性化」は「一単位時間で行う授業から発想を広げ、キャリア教育の視点も踏まえながら、どんな自分になりたいのか、どのような生き方をしていきたいのかなど、全教育活動を通じて行う道徳教育を構想していけば、これまで以上に道徳科を要とした道徳教育のダイナミックな展開が大いに期待できることです。」（p93）と述べている。そこで今年度は、児童生徒一人一人が重点的に育てたい道徳的価値を設定し、道徳学習プログラムを作成することで、道徳的諸価値についてより自分事として捉え、生活に生かしていけるようにする。

図2 ハートかがやきプログラム



4. 研究仮説

教師が対話的な学びに焦点を当てた道徳教育を展開していけば、主体的に学びに向かう中で、自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒を育成することができるであろう。

5. 研究の内容

- 道徳科の授業づくりに関わる理論研修
- 対話に焦点を当てた道徳科の授業づくり、および道徳学習プログラムデザイン
- 「道徳教育推進拠点校地域事業」の連携校（熊野東中学校・熊野第四小学校）との連携
 - ・ 東中学校区道徳推進協議会における合同理論研修・指導案検討
 - ・ 推進リーダー教師と連携校によるティーム・ティーチングの授業実施および道徳教育推進に関わる情報の共有

6. 年次計画

(1) 1年次 / 今年度

- ① 「道徳的価値」及び「発問の工夫」等、研究全般に関する理論研究
- ② 「主題解釈」の研修実施
- ③ 道徳科の授業実践
- ④ 研究の方向性及び内容の吟味と修正

(2) 2年次 / 来年度

- ① 1年次の成果と課題をもとにした授業改善
- ② 授業実践
- ③ 研究のまとめ

7. 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
・対話的な学びに焦点を当てた取組（対話場面設定の工夫や主題解釈と発問の工夫）は、自己の生き方について考えを深める児童生徒の育成に有効だったか。	・教師の授業内容（実践記録を含む）評価（行動観察、ワークシート） ・教師対象の意識アンケート ・教師の授業内容（実践記録を含む）評価
・対話的な学びに焦点を当てた取組（自己を見つめるプログラム）は、自己の生き方について考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成に有効だったか。	・拠点校事業意識調査 ・抽出児行動観察 ・抽出児童の道徳学習プログラム振り返り記録

8. 検証計画

4月	研究主題・検証計画立案と提案
5月	第1回アンケート調査実施（児童生徒・教師）
6月～7月	第1回アンケート調査の分析と考察・抽出児童決定
8月	研究授業の実施
9月	1学期の実践記録の分析と考察
9月～1月	第2回アンケート調査実施（中心校児童・中心校教師）
12月	第2回アンケート調査の分析と考察
1月	研究授業の実施
2月	2学期の実践記録の分析と考察
3月	第3回アンケート調査実施（児童生徒・教師）
4月	第3回アンケート調査の分析と考察
5月	研究のまとめ・次年度の計画立案

9. 検証のための実践計画

月	日	研究内容
4	4	校内研修…研究推進計画・学習指導案型提案・授業者決定
4	9	3校担当者連絡会
4	9	◆道徳教育部会①…研究の概要、協議 (参加者：校長・宇田)
4	14	校内研修…授業づくりシート、道徳学習プログラム作成 等
5	26	校内研修…模擬授業・指導案検討、授業研究日程調整 等
6	30	第1回研究授業（3年1組）(T2：推進リーダー) ◆道徳教育部会② ※熊野町道徳教育推進協議会①を兼ねる
6		校内研修…授業づくりシート、指導案作成
6		3校担当者連絡会
7		3校担当者連絡会
7	28	合同研修…指導案検討、理論研修、研究会授業の模擬授業等 ◆道徳教育部会③（参加者：東中学校区教員全員）
8		校内研修…研究会の指導案修正・研究会計画準備
8		3校担当者連絡会
8		校内研修…模擬授業・指導案検討
9	10	第2回研究授業（6年1組）(T2：推進リーダー)
9	29	研究授業（第四小） ◆道徳教育部会④
9		校内研修…模擬授業・指導案検討
10	24	第3回研究授業（2年1組）(T2：推進リーダー)
10		3校担当者連絡会
11		道徳参観日
11		3校担当者連絡会
12		たんぼぼ学級研究授業（たんぼぼ1組・2組）
12	15	研究授業（東中） ◆道徳教育部会⑤
1	23	公開研究会、研究授業（第二小：1年1組、4年1組、5年1組） ◆道徳教育部会⑥（参加者：東中学校区教員全員）
1		校内研修…研究のまとめ
2		全体研修…事業計画、完了報告等確認、実践発表 ◆道徳教育部会⑦ ※熊野町道徳教育推進協議会②を兼ねる（参加者：校長・宇田）
3		3校担当者連絡会
3		校内研修…令和8年度に向けて

【引用・参考文献】

- 浅見哲也（2021）「道徳科 授業構想グランドデザイン」明治図書出版株式会社.
- 浅見哲也（2023）「道徳授業の個別最適な学びと協働的な学び」明治図書出版株式会社.
- 荒木寿友（2021）「いちばんわかりやすい道徳の授業づくり対話する道徳をデザインする」明治図書出版株式会社.
- 木原一彰（2021）「第 22 章 各教科等との連動による相乗効果で道徳教育の可能性を開く」『新道徳教育全集 第3巻 幼稚園、小学校における新しい道徳教育』株式会社学文社、pp.186-187.
- 永田繁雄（2017）「平成 29 年版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 特別の教科 道徳」東洋館出版社.
- 宮里智恵（2022）「あらためて知りたい教材分析法 心情曲線を生かした教材分析」『道徳教育 10 月号』明治図書出版株式会社.
- 文部科学省（2018）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編」廣済堂あかつき株式会社.
- 中央教育審議会（2016a）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）」 p. 50, p. 225.
- 加藤明（2019a）「新学習指導要領をひもとく」文溪堂.
- 新川靖（2020）「道徳授業における『主体的・対話的で深い学び』と道徳科の目標についての一考察」.

10. 結果と考察

10.1. 【視点1】対話的な学びに焦点を当てた取組（対話場面設定の工夫や主題解釈と発問の工夫）は、自己の生き方について考えを深める児童生徒の育成に有効だったか。

教員を対象に、対話的な学びに焦点を当てた取組に関わるアンケートを実施したところ、結果は図3のとおりになった。肯定的に評価した教師の割合は100%となり、授業づくりシートの活用や対話場面設定の工夫が、自己の生き方について考えを深める児童生徒の育成に繋がっていると実感していることが分かった。表5に示した自由記述では、対話的な学びに焦点を当てた取組を行ったことで、道徳科の時間に、児童生徒がこれまでの自分と今の自分を比べて振り返ったり、自分自身の生活と関連付けて今後の生き方について主体的に考えを深めていたりしたことが記載されている。また、これらの取組を行うことによって、道徳科の授業だけに留まらず学校生活全般において、対話を通して問題を解決、改善していこうとする児童生徒の姿が見られ、このことも自己の生き方について考えを深めることに繋がっているという意見も教員から挙げられた。

6月に行った第3学年の研究授業では、対話場面設定の工夫として、ICTを活用して本時の主題に関わる自分の今の思いを心情メーターで表したり、座席をコの字に配置して対話しやすい環境を設定したりした。発問の工夫では、授業づくりシートを活用し、対話を促すような中心発問として、主人公と友達の2つの立場の気持ちを考える発問を用意し、内容項目「友情、信頼」の中学年のキーワードである「双方向の信頼」が感じられるようにした。その際、自己内対話を促すためにワークシートを活用し、自分の立場を明確にした対話ができるようにした。これらの取組により、児童はそれぞれの立場になりきって対話をすることができ、対話を通して相手の思いを知り、友達と助け合うことについて考えを深めることができた。また、ハートかがやきプログラムに記入した振り返りでは、「これからはもっと友達のことを知ってもっと仲良くなりたい。」「あいちゃんとちえちゃんみたいに心が通じ合うために、友達

のいいところをみつきたい。」といった記述が見られ、道徳的価値に関わる事象を、自己の生き方に関連付けて考えることができていることがわかる。

また、本年度は、対話の土台となる対話スキルを身に付けるために、週1回トークタイムを設定し、全学年で実施した。2学期には、他学年のトークタイムを見学する機会を設け、児童自身が「よりよい対話とは何か」を具体的にイメージできるようにした。これらの取組により、対話を楽しむだけでなく、自分の考えを広げたり修正したりする児童の姿が多く見られるようになった。こうした対話スキルの向上により、道徳科の授業においても、友達の考えを手掛かりに多面的・多角的に考えようとする姿勢が育ち、道徳科における主体的で深い学びに繋がったと考えられる。

これらのことから、対話場面設定の工夫や主題解釈と発問の工夫を行うことは、児童が道徳的諸価値についての理解と自己の生き方を関連付けて考え、これからの生き方について思いをもつことに少なからず影響を与えていると推察できる。

一方、対話的な活動を取り入れることで、児童が安心して自分の考えを表現し、広げたり深めたりする場面が増えたが、考えの違いや対立を踏まえて意見を練り合う段階まで十分に高まっていないという課題がある。今後は、児童の発言を繋ぎ、焦点化したり揺さぶったりすることで思考の深まりを促す教師の関わりについて、さらに工夫していくことが必要であると考えられる。

図3 対話的な学びに焦点を当てた取組に関するアンケート結果

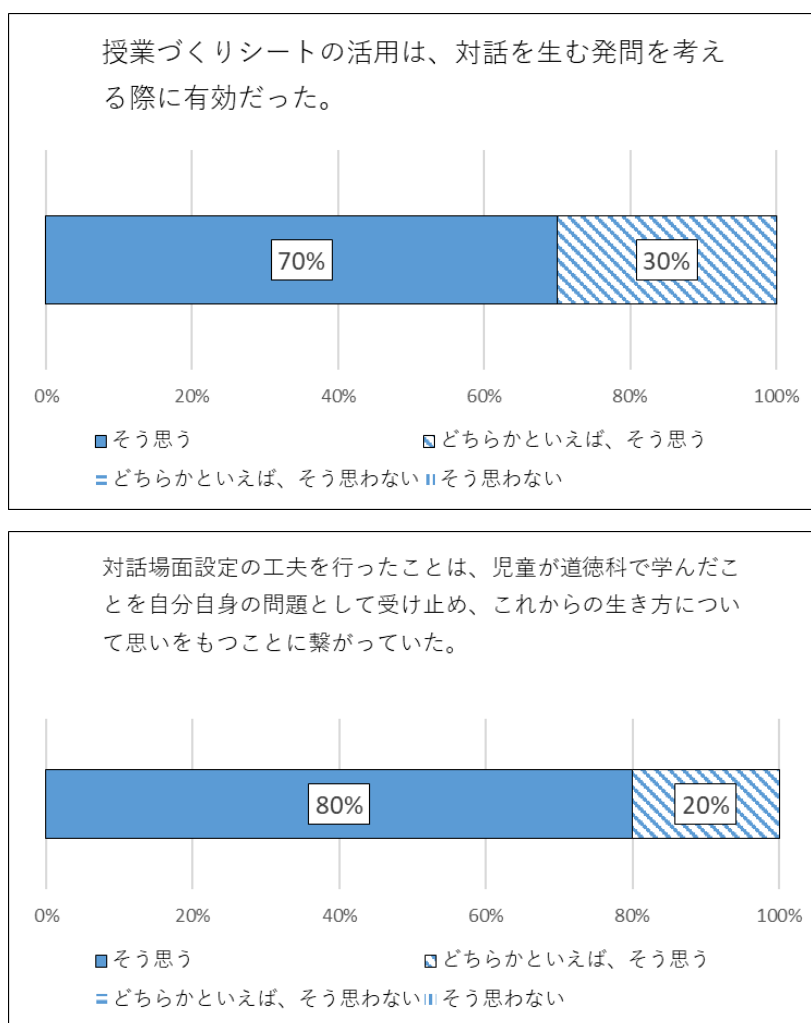


表5 対話的な学びに焦点を当てた取組に関するアンケートの自由記述

- ・振り返りをするときに、「今まではこうだったけど」と友達と話していた。
- ・道徳を好意的にとらえている児童が多い。生活と関連付けて考える児童が多い。
- ・自分がこれからの生活でこうなりたい、中学生になったら、大人になったらこんな人になりたいなどと、今後について深く考え、自分なりの言葉で表現している。
- ・学級集団の自治力がより高まった。例えば、学習面では、子供自らが学習課題と計画をつくり、解決までを自分たちの手で行うなど。生活面では、学級でもち上がった問題点があれば話し合いによって解決・改善していこうとする姿勢が見られるなど。

10.2. 【視点2】対話的な学びに焦点を当てた取組（自己を見つめるプログラム）は、自己の生き方について考えを深め、よりよく生きようとする児童生徒の育成に有効だったか。

6年生の道徳学習プログラムより

図4 児童による「ハートかがやきプログラム」への記述

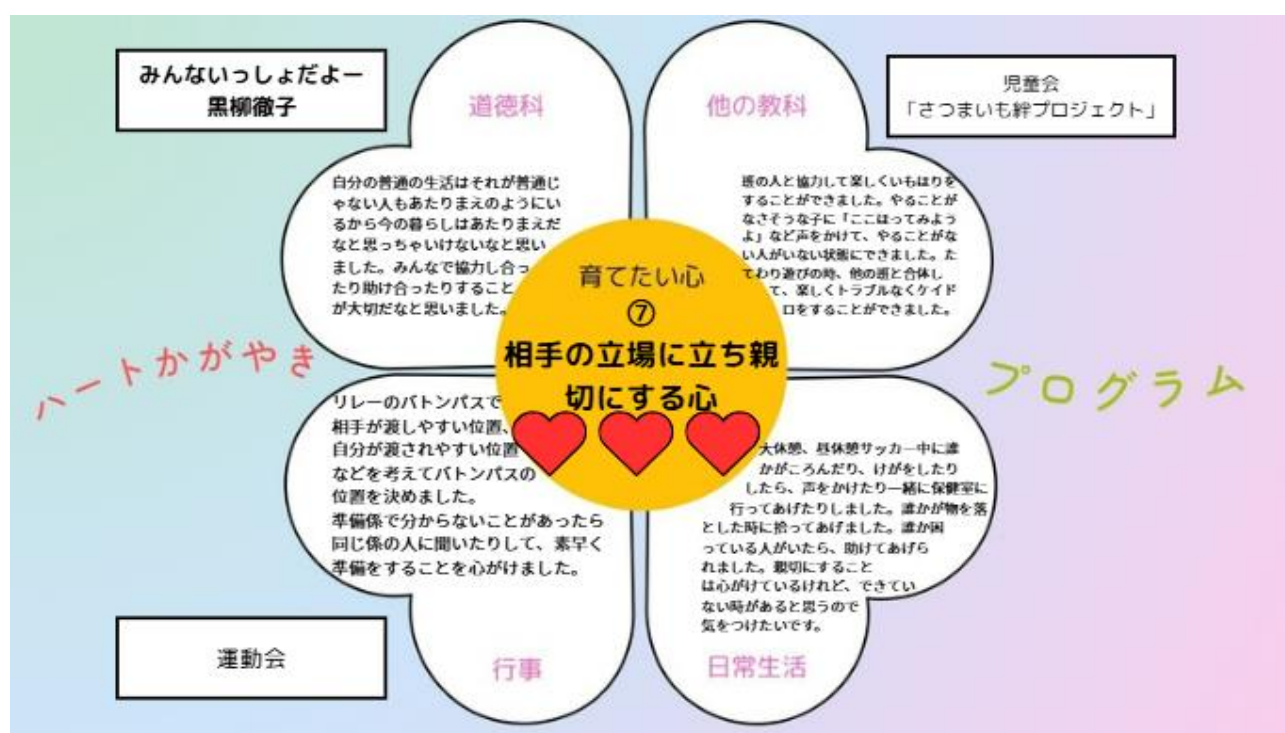


図5 児童による「ハートかがやきプログラム」への記述



図4に示したハートかがやきプログラムの記述からは、「相手の立場に立ち親切にする心」を育てたいと選んだ児童が、道徳科で自分が置かれている状況を振り返り、道徳科以外でも様々な場面で相手のことを考えて行動したことが分かる。また、日常生活の振り返りでは、親切に対する自分の行動を振り返り、これからももっと人に親切にしていきたいという思いをもつことができた。

図5に示したハートかがやきプログラムの記述からは、「より高い目標へ、くじけずやりぬく心」を育てたいと選んだ児童が、道徳科で学んだことを通して、自分が足りないものや自分をもっと高めなければならないものを理解し、生活に生かしたいという思いをもったことが分かる。また、他教科や行事でも育てたい心を意識して取り組み、さらに高い目標を立てて目指していきたいという思いをもつことができた。

この道徳学習プログラムを実践したことで、児童は、自らのこれからの生き方についての思いを生活場面で生かしたり、さらにこのようにしたいという思いをもったりしたことが分かる。昨年度の課題から、「個別最適な学び」の「学習の個性化」の考えを取り入れ、児童生徒一人一人が重点的に育てたい道徳的価値を設定し、プログラムを作成したことで、一つの内容項目に対して、道徳科だけでなく、生活全般において育てたい心を意識し、日常生活に生かしていったものと推察される。

一方、この道徳学習プログラムは児童生徒自身がそれぞれの目指す姿に向けて作成するものであるため、作成・実施を児童生徒に一任し、そこに教師の働きかけがなければ、児童生徒にとって新たな気付きや成長に繋がらないことが課題として挙げられる。児童生徒の育てたい心を把握し、適切な助言ができるよう、集中的に見取る期間を決めたり、助言する機会をつくったり等の仕組みを作っていくことが必要であると考えられる。

意識調査アンケートより

12月初旬に教師および児童に対して意識調査アンケートを実施したところ、「（児童生徒が）道徳科の授業で勉強したことを自分の生活にいかしている」（括弧内は教員用）の結果は図6に示すとおりとなった。

肯定的回答は教師が96.1%、児童生徒が87.3%となり、年度当初の同じ設問の結果と比較すると、教師は15.9%、児童生徒は2.5%上昇した。その要因として、より自分事として考えることができる道徳学習プログラムを実施したことで、道徳科で学んだことを他教科、生活とも関連付けて考えることができ、そのことが、教師、児童生徒ともに自分の生活に生かしている実感に繋がったと考えられる。

また、今年度は道徳教育におけるコミュニティ・スクールの仕組みを生かした学校内外の資源の活用として、年度当初に道徳科でゲストティーチャーを招いての授業を全学年で計画し、実施した。学校内外の人々の生き方や考え方に触れることで、より自分事として自分の価値観や生き方について考えることができ、よりよく生きようとする児童の育成に繋がったと考えられる。今後も、これらの取組を一過性のものにせず、計画的、継続的に充実させていくための仕組みを検討していく必要があると考える。

図6 意識調査アンケートの結果

